

地志殘卷（羽田、ペリオ共編、敦煌遺書第一集活字本所收）にも「興胡泊、州西北一百一十里」と記されて居る。別にこれも同所出土の有名な慧超の往五天竺國傳の中にも興胡といふ名が見える。即ち同書の健馱羅國の突厥について記した條に（羽田、ペリオ共編、敦煌遺書第一集、寫真本五枚、左、六行目）「漢地興胡」云々の記事があり、またその九枚右二行の識匿國王についての記事に、「彼王常遣三二百人於大播蜜川、劫彼興胡」と見えて居る。尤も慧超傳の兩處の興胡といふ字は鮮明を缺いて居るので、藤田博士の慧超傳箋證には共にこれを「興胡」と讀み（再版本三十九枚右及び八十枚右參照）そうして後者について「與殆商之譌」と釋してある。即ち「劫彼興胡」は「劫彼商胡」の譌であるといふのである。然しながら興の字體鮮明を缺くに拘はらず、原本に於ては「興」字はみな「与」と書き「興」と書いたものは無いやうであるから、仔細に原本を檢讀すれば當然「興」と讀むべきであることに氣づくのみならず、「興」と讀んでこそ意が通じ、「興」と讀んでは全く解することが出來ないのである。藤田博士は原本の「興」字を他の所でも「興」と讀まれたが爲に、例えば箋釋五十八枚裏十行に於ても、「〔波斯國〕土地人性、受與易、常於西海汎船、入南海」云々と讀んで居られるけれども、これも「土地人性、愛興易」と讀むべきで、受は愛の誤、興は興の誤である。「受」が「愛」の譌であるべきことは既に羅氏の札記に見えて居るが、同氏は「興」を「貿」の譌と見て、「貿易」と讀まうとしてゐる。蓋し「興易」といふ語が後に述べるやうに唐代屢々用ゐられて居ることが、左程周知のことでないのに因るのであらうか。尤もかゝる誤は羅氏や藤田博士の誤讀といふよりも、兩氏が直接據られたのは、羅氏が誰かに原本を筆寫させた本に外ならぬと思はれるから、誤讀の原因はその寫字生氏にあるといはねばなるまい。原本を寫真版について見る人には誰にも直ちに氣附くやうに、原本